

NPO法人ウェアラブル研究開発機構 「チームつかもと」が、 近未来のウェアラブル・コンピュータの姿を 大胆予想!

昨年引き続き、「チームつかもと」がWPC EXPO 2004に研究成果を出展し、ウェアラブル・コンピューティングの未来を予言した。5つの予言が実現する日も近い!?



二〇〇四年一〇月二〇〜二三日までおこなわれたWPC EXPO 2004において、「チームつかもと」(代表#神戸大学・塚本昌彦教授)は、「ウェアラブルコンピューティングショー」と題するステージイベントを開催するとともに、「生活のなかでのウェアラブル・コンピューティング」をテーマに展示ブースを設営し、未来のウェアラブル・コンピューティングの世界を提案した。

展示の軸となったのは、「五つの大予言」。第一の予言は、「ウェアラブル・デジカメは二年以内に流行する」というもの。メガネやサンングラスの表面に貼り付けるタイプのヘッドマウントディスプレイ(HMD)をデジタルカメラに接続し、撮影中の画像を確認するという技術を紹介した。混み合う運動会場で子供を撮影

しているお父さんを想定したもので、カメラを高く持ち上げても、画像はHMDで確認できるというスグレものだ。次のステップとして、「サンングラス型」デジカメも紹介した。

第二の予言は、「ウェアラブル・ケータイは三年以内に流行する」。先の予言と同じく、HMDをサンングラスにつけ、携帯電話の画面を見るという使い方を提案した。こちらは、長いメールを打ったり読んだり、テレビを視聴するために活用する。すでに、二〇〇五年春をめどに製品化も進んでおり、数万円程度の価格で売り出す予定だ。

第三の予言は、「五年後にはウェアラブル端末を使って、さまざまな場所でユーザーが必要とする情報を受信できるようになる」と予想。第

四の予言は、「一〇年後には子供は外で鬼ごっこゲームをするようになる」。センサや通信装置を身につけることで、人間が外界との相互的な関係性を築くようになり、ゲームに夢中の子供たちも、外で元気に遊ぶようになるだろう、と予想した。第五の予言は、「一〇年後、赤ちゃんもHMDをつけるようになり、親とのコミュニケーションをとるようになる」として、HMDを通して、ベランダで洗濯物を干すお母さんと赤ちゃんのコミュニケーションを想定した。

いずれも大胆な予言だが、ちょっと先の未来に目をやると、決して遠いSF世界のこととは思えない。ウェアラブル・コンピュータが身近になり、私たちの日常に浸透する日もそう遠くはないだろう。